石の宝殿

史跡かるた集

—石の宝殿・竜山周辺史跡の魅力を伝える—

令和２年 12 月

石の宝殿研究会

石の宝殿研究会
HP 接続用 QR コード

石の宝殿・史跡かるたの作成について

―高砂　石の宝殿と竜山採石遺跡の周辺の魅力発見と伝承―

兵庫県高砂市の石の宝殿と竜山採石遺跡の周辺には、美しい自然の山川・風物に恵まれた地で数限りなく、人々の夢を育む伝説が伝わっています。

気候風土においても、海・川・山の自然の三拍子が揃い　水害もなく竜山連山に守られて、住みよい田舎町の雰囲気をかもし出しています。

この素朴な石山風景を持つ土地から生まれ出た神話・伝説・民話（昔話）・景観・石造物等は私達を虜にします。

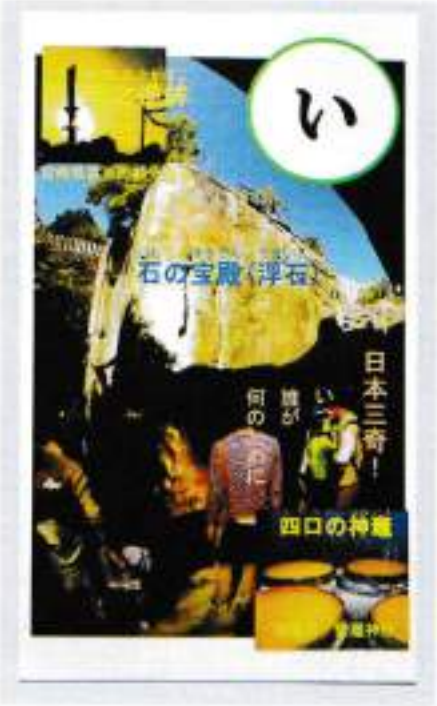
しかし、これらの残すべき伝説や民話なども、この地域の人々の記憶からの中から、一つ一つ忘れ去れようとしています。

数多くあるこれらの言い伝え、歴史的な魅力の一つ一つを探り当て郷土への愛着や懐かしい想いと魅力の一部を、微力ながら「史跡かるた」として創作しました。　更に多くの皆様方に楽しんでもらえる様、この度、「史跡かるた」を冊子に纏め発刊することにしました。

国史跡の魅力が多くの皆さんの心の片隅に残り、次世代への伝承となることを願っております。

令和２年 12 月吉日

石の宝殿研究会　史跡かるた作成実行委員会



あ

天の磐舟
二神が降臨
伊保の山

あ意味

天の磐舟は大穴牟遅神、少名毘古那神の二神が天津神の命で国土を経営するため伊保山に降り立った時の乗り物との伝説がある。

全長約2.7m、幅約1.4m、高さ約0.7m有り。大きな6個の突起がついている。

発見場所は伊保山（112m）の頂上附近。　これは、竜山石製の「家形石棺の蓋」なのです。6世紀の後半に製造されたと推定されている。

※高砂市教育センターの中庭に保存

（法華山谷川沿い）

い

石・鉄・銅
謎の伝説
日本の三奇

い意味

宝殿山（標高 65m）の中腹に、石の宝殿と呼ばれる謎の大石があり、生石神社のご神体として祀られている。この石の宝殿は、誰が、いつ、何のために造ったか、よくわからない、謎を秘めた不思議な遺跡である。

特に宮城県の御竈神社にある「四口（よんく）の神竈（しんかま）」、宮崎県の霧島東神社　高千穂山にある「天之逆鉾」、それに生石神社にある「石の宝殿」の浮石を加えて、日本三奇と数えられている。

う

魚崎構居に
立てば想う
もののふの影

う意味

竜山の頂上は、位田長兵衛のお城（館）があった。すぐ西の方には、当時の侍が討ち死にしたとの言い伝えがある「血の池」の跡が残る。

ハイキングで登ったときには、下界を見下ろして静かに戦国時代を偲ぼう。

※魚崎構居の城主は嘉吉元年（1441）には和木田兵庫介綱忠であったが、その後は天正六年（1578）には志方の廣城として放棄されるまでは位田長兵衛が構主であった。

（日本城郭大系 12 巻より）

え

エイヤッ と
押せば動くか
霊岩石

お

おんびきも
晩酌したか
赤ら顔

え意味

大座り（座りキズ・大きな節理）の上にある石の宝殿の分岩です。（神秘的な空間の石の宝殿だけでなく、ここもパワースポットだ！）

"全身で力を込めて押して下さい。必ずや神様より偉大なる力を御授け下さるでしょう。岩を触れた手で体の悪い部分を撫でましょう"

たちまち霊験あらたかとか。

※霊岩は丁度南北の方向に垂直の割れがあり、何か不思議さを感じるものがあります。コンパスで確かめて見て下さい。

お意味

おんびきは竜山石（赤）から作られ主に住居の玄関・庭に良く見かけます。おんびきとは、出雲神話に出てくる少彦名命の眷属の「ひき蛙」のことです。　もちろん大穴牟遅神・少毘古那神の二神をお祀りしている生石神社を中心に、高砂周辺から播磨各地に竜山石製のおんびきが存在します。以前には縁起物として"福かえる"など呼ばれ、竜山採石場で多く製作されていました。　今でも　縁起物として大事に伝承されています。ここでは、おんびきを擬人化して"蛙さんもお酒を飲んだのか？顔が赤くなっている！"と詠んでいます。　※少彦名命：「薬、養蚕、酒つくりなどの神様」と言われています。

か

学生の
勉強後押し
お結び岩

か意味

観瀑処の三大文字の右横にある"おむすび形の丸い石"は、落ちそうで落ちない不思議な石です。

若い書家　永根文峯の観瀑処とかけて　落ちない石ととく　その心は　どちらも敢闘（かんとう）したでしょう。

いまや、受験生が合格祈願に訪れる願掛けの聖場となっている。

き

久太夫が
助命のお礼に
鳥居建て

き意味

４００年以上前に魚橋の豪商 神吉久太夫の祖母は黒田官兵衛の娘でした。 神爪村に石の宝殿の一の鳥居がある、傳らの避難二つは山片蟠桃が結婚祝いの郷里に奉納した。　ある年　城崎温泉にて入湯した折に優遇を受けて"嘉の湯"に入り、偶然姫路藩主榊原式部守に会う。

久太夫は飲酒しており応答が甚だ無礼であった。　著しく式部の怒りを受けて、一家断絶の悲運に陥るところ、直ちに帰村して氏神生石神社に参籠（こもる）り、一の鳥居を建立し、願をかけて命拾いした。

（原町内会有文書より）

く

草むらに
隠れた石室
一号墳

く意味

駐車場の上方にある神輿蔵の横に竜山１号墳がある。その下に石棺の身と蓋が確認できる。

（既往の調査　大正５年～平成22年）

転がった石棺の奥の雑木林を発掘すれば、何と古墳があった。残念ながら、盗掘のため、米粒一つ発見されなかったが、浮石の制作者と深い繋がりのあるようである。

（この人物の親か祖父があの石宝殿製作工人の中心的人物？）

幅0.6m、長さ1.18m、
蓋と身の高さ合わせ0.62m）

け

間知石
運ぶ　水路は
法華の谷川

こ

ゴリラ岩
昔の石工は
芸術家

㊀意味

竜山採石場は加古川本流であった法華山谷川（洗川）の豊かな水量に恵まれ石材の運搬に好都合だった。
石積みに使用される四角錐形の石材で底面が表に出るように積み，石垣，護岸，擁壁（ようへき）などに日本では古くから用いられている

石垣用の間知石、基礎に使う延べ石等沢山の石が長い年月を懸けてここから積み出された。

㊁意味

高砂市の伊保山にあって北側から見える。（姫路バイパス側）
凛とした雄ゴリラの横顔に見える。
採石で偶然に残った結果、人工的に造ったような男前ゴリラが出来上がったとの地元の方のお話しです。
ほんと、迫力あるゴリラの横顔だね！！
季節により、時間により、天気により様々な表情をみせてくれる。
※北側からの撮影となるので逆光の覚悟を要す。

さ

採石は
播磨風土記の
昔より

し

陣幕島之助は
姫路の　殿様
大ファン

す

座り疵
見つけた石工の
大手柄

㊦意味

約1300年前に編纂された播磨国風土記に石の宝殿のことが記載されている。

※原の中に池があるので、池之原と言います。この池之原の南に石造物があり、その形は家のようで、幅二丈（約6m）奥行き一丈五尺（約4.5m）高さも同様。

その名を「大石」と言う。

言い伝えによると、聖徳の王の御世に弓削大連（物部守屋）が作った石だと言われている。採石の歴史は其れより古い。古墳時代から現代に至るまで、市内で産出されている石材・竜山石を採石した形跡がみられる。　約1700年前から続く採石遺跡は歴史の教材である。

㊤意味

初代の陣幕は、相撲史上最強の大力士で雷電為右衛門を破ったことで知られている。竜山出身の三代目陣幕島之助は相撲の盛んな播磨で姫路藩の殿様酒井雅楽頭のお抱え力士として可愛がられ、“市松格子”の化粧まわしが与えられており、文政八年に長崎に行った折にはシーボルトとも親交があったと言う。石の宝殿で“龍門茶屋”を経営し、生家には平成二十三年まで白壁に食事処「陣幕」の漆喰造り及び手形等があった。

㊦意味

石の宝殿は俗に浮石という。

浮石の底は座り疵（層理）部で岩盤と離れている。浮石の浮くという意味は石工の用いる言葉で、岩にひびが入る、即ち割れ目の出来ていることを“浮く”と言っている。御神体（石の宝殿）は水に浮いているように見えることから、これまで、その神秘性が話題になっていた。千数百年前の石工がそこに目をつけ横倒しの宝殿を造ったのかも知れません。※座り疵が有るにもかかわらず、868年のこの地を中心とした大地震、そして阪神大震災にも耐えた。）すごい！の一言。

せ

絶壁に
姥が懐
二号墳

そ

曾我蕭白が
絵馬奉納の
加茂神社

㊀意味

伊保山の麓の中腹は大きく開発されていて、「メモリアルパーク竜山」という名称の墓地になっている背後が、40mほどの垂直の崖面になっており、その断崖の頂上に今にも墜ちそうな横穴式石室の開口部分が小さくみえる。瀬戸内海を眺望できる絶好の場所ここが竜山2号墳。

※周辺が石山であり墳丘の盛り土の確保が困難なため岩盤を掘削し石室の床面を下げている。この場所は北が山で冬の北風を弱め、南が開け日当たりのいい地形で、冬過ごしやすい。丁度乳母に抱かれているような温かい土地である。

別名「姥ケ懐」と言う。

㊀意味

神社の蔵から希代の画家曾我蕭白の名前が書かれた人馬の絵馬が発見された。伊保の真浄寺あたりを、今も「加茂条」と呼ぶ人があるが、加茂神社は、元はこの辺りにあったと記録が残る。しかし、江戸時代初めの1680年頃の「加茂条」の大火により賀茂神社は焼失し、加茂山（竜山）の山麓に遷座された。形は駒札形で黒塗りの枠縁で囲まれた中に、馬と人物が描かれている。馬は黒一色であるが、脚には曾我蕭白の特色ある描法が見られる。

た

竜山に
石切唄の
響きあり

た意味

「播州石乃宝殿石切唄」
リズムをつけて「シャントコイ、シャントコイ」の間の手を入れながら、ゲンノウで石を割っていく声が遠くまで聞こえていたのどかな時代もあったとか。

山から石を切り出し、加工する石工たちの間で、石切唄というのが唄われてきた。ここ、兵庫県高砂市にある竜山石の石切り場では、「播州石乃宝殿石切唄」が、古くから伝わっている。職人も減り、唄も一時期途絶えていましたが、10年ほど前に録音テープがみつかり復活されている。

※音源と歌詞は松下石材店（株）提供

ち

町人学者の
山片蟠桃
これは石棺・石槨ぞ

ち意味

蟠桃は播磨国印南郡神爪村に生まれ。名前は、升屋の番頭をしていたことからもじったもので、中国原産のモモに由来するという説もある。　鬼の存在や神仏を否定する無神論者の蟠桃も、郷里の浮石を見て「神様製造」説を漢詩で詠ったり、「石棺説」を唱えたり、悩んだみたいだ。主著に『夢の代』がある。生石神社の「一の鳥居」といわれ、石の宝殿の「一の華表」ともいわれている鳥居の手前の燈籠は、山片蟠桃寄贈の燈籠です。※辞世の句「地獄なし極楽もなし我もなしただあるものは人と万物」「神仏化け物もなし世の中に奇妙不思議のことはなおなし」

つ

辻に建つ
石柱
旅の道しるべ

つ意味

宝殿駅前にも生石神社への古い道標「左　石宝殿」がある。
ようこそ高砂市へ！

江戸時代になると観光客の目印に竜山石の道標がそこここに建ち、旅の“　道しるべ　”となった。

●道標
（大正5年・魚川橋の東詰）
「左　志方　法花山　清水」で、西一乗寺と、さらに北の25番札所御嶽山清水寺への道標。魚川橋は法華山谷川に架かる橋。

て

鉄鉢を飛ばし
俵・堕として
米田邑

と

十帰りの花
幾返りの
石室かよ

て意味

観瀑処への登り口に空鉢塚があります。法道仙人は、空の鉢を空中に飛ばして、お布施を受けるという不思議な術を心得ていましたが、良く竜山の岩の上に鉢を置いて神合を通る船に飛ばして食物を乞うたと言われている。

法道仙人の鉄鉢に続いて飛び立った米俵の一つが村へ墜落した。古墳時代より続く米田(米堕)村地名の伝説がある。

と意味

石の宝殿は、8 世紀前半から 1,300 年もの間、ここに在り続けている。上部には土が積もり、松が二一三本生えていた。時代も移り変わり、今は雑木が茂っている。　十返りの花は、松の花のことで、百年に一度、即ち千年に十度咲くと云われ、目出度いものとされている。

● "十かへりの花いくかへりの石室かよ"

(西国紀行　小林一茶)

●" 十返りの花　幾返り松の花 "　(真左舌)

※(説明) 今、石の宝殿の上部には松の花が咲いているが、百年に一度咲くというこの花が、いったい何度咲いたことだろう。

な

情けなや
小虫　誘われ
いしもち草

に

西の方
かすかにみえる
姫路城

ぬ

塗り絵より・油絵よりも
鮮やかな
竜山紅葉　ハゼ・ウルシ

な意味

宝殿山に自生している“イシモチソウ”（石持草）は多年生の食虫植物で春先に茎生葉として、長さ 10mm～15mm 程度の葉柄の先に、幅 4mm～6mm の三日月型の捕虫葉をまばらに互生する。

茎生葉には粘液滴がつき、これで小石を粘りつけて持ち上げることができるとして和名がある。

“イシモチソウ”に捕まった小さい虫が情けなそうにもがいているさまを詠んだ。

に意味

宝殿山山頂からは、播磨アルプスの景観及び 360 度のパノラマを楽しむことが出来る。

竜山から西へ続く山塊と、高御位山がくっきりと見える。遠くには稲美町方面のようすが一目で見渡せ、はるか北播磨の山地から加古川下流域、播磨灘までもが視界に入る。近くには竜山石の採石場の古墳時代の石工が見たであろう風景が目前に迫る。晴れた日には、西方約 15 kmに姫路城が、ある立ち位置で極く小さいが白い天守閣が見える。東に振り返れば明石大橋の支柱も見える。

ぬ意味

悠久の歴史の中に存在し続ける竜山には、朝露と太陽の光芒を背景に黄金色に輝きそそり立つ岩壁（屏風岩）が数多くある。

竜山は、春の山桜や秋にはウルシ（ハゼの木）の紅葉が緑と調和し、遠景は絵にも描けない美しさとなる。　ハイキングでにぎわいを見せる山麓には紅葉が色づき始めており、深まりゆく秋が感じられます。柿の実も加わり、特上クラスの彩りを見せてくれるでしょう。

ね

年貢米
あさがら池の
埋め立て新田

の

野菊咲く
龍門坂を
生石へ

ね意味

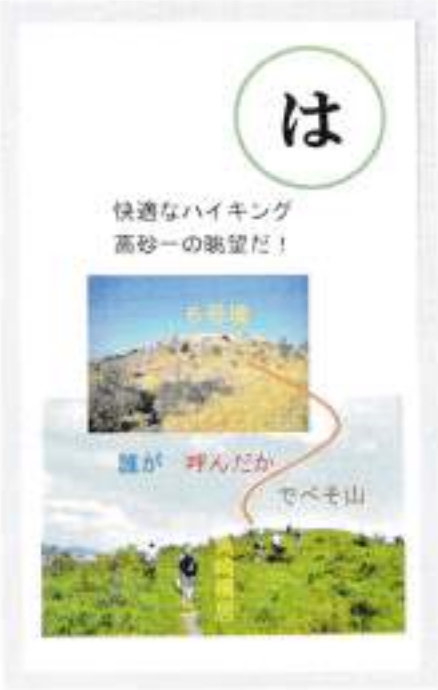
「あさから池」の名は、池は浅く、日照りですぐ枯れる池と言う意味でした。姫路城に入った池田輝政は、川や池の埋め立てに着手し、加古川の流路を変え、中筋の池を埋め立て、浜手に塩業を奨励すると云った土木事業を興し、庶民の生活と藩財政の基盤を固めた。

※北池村・南池村の開発は、この上部井堰の開発と同時に行われ、阿弥陀村や魚橋村の人々が入植し、あさがら池を埋めたて北池、南池の二村をつくった。

の意味

加茂神社から生石神社へ行く道は、別名龍門坂と呼ばれた。県道392号は神社への参道である。道沿いに江戸時代に相撲で活躍した力士龍門の家の白壁には「陣幕」の漆喰文字が浮き出ていた。
（平成23年に解体）

※陣幕の若き日の四股名は龍門と言う。
陣幕は竜山の木下家出身で
木下彦造―友ゲ島―高見山―龍門瀧之助―龍門鯉之助―陣幕島之助などと改名した。



は

ハイキング
目指すは
へそ山　六号墳

は意味

国史跡「石の宝殿」の南東にある「竜山」に加茂山、観濤処または塩市・山条地区からの登山道がある。目指す6号墳は通称「でべそ山」と呼ばれた。
頂上には、竜山6号墳のほかに魚崎構居跡もある。　又、新しい山条の登山道は登り口の標識に導かれ、山の神にお参りしてハイキング開始となる。道中には・狸の穴・白の荒岩・ジャイアント馬場岩(だんご大石)・さざれ石風の竜山石・竜山の木蓋（観望郷と言う人もある）で播磨灘を見ながら魅力いっぱいの「でべそ山」へのハイキングを体験しよう。

ひ

姫様が
座って詠った
謎の丸石

ひ意味

寛文の頃　九州島津藩主の姫様十二歳の時　当社に詣で　この石に腰掛け、和歌を詠まれた。

「たまにきて　またこむことの
かたければ
なごり生石の石のみあぐら」

江戸時代には　多数の方々が生石神社にお参りされていました。
この姫様の名前は島津家の
どなたかは今も謎です。
※「播磨鑑」には7歳とも記載あり。

ふ

風格と　流麗さ
文峯遺墨の
観濤処

ふ意味

姫路藩の儒者　永根文峯の遺墨で 19 才の時に書いた三大文字“観濤処”を　父伍石は藩主酒井侯が“眺望絶佳の地”として賞嘆していることから、親交があった河合寸翁に依頼し加茂山断崖の播磨灘を眺望できる場所に「留め、撓ね」まで精緻に刻ませている。これは地域の宝である。
碑文には
“親が子を想う気持ち”
が彫られている。
※天保7年(1836年)に完成
※この断崖の周囲に大矢の痕跡が有り採石遺跡の重要なポイントと成っている

へ

触先の如く
さざ波に　岩石浸食
竜が鼻

ほ

本丸や
位田長兵衛の
夢の址

へ意味

海水に浸食され龍の鼻のような奇異な形状になっているこの岩は、明姫幹線工事で、廃棄されかけた。形状がどこか竜の頭に似ているところから竜ヶ鼻と呼ばれているこの岩は、現在ある明姫幹線竜山大橋西詰の南側ではなく、竜山大橋より北側の法華山谷川の川の中にあった。しかし、明姫幹線工事に伴って現在の場所へ切り取られ置かれた。郷土史家の熱意で保存出来たものである。

※日本山海名産図　の記述

”石の宝殿は即ち立山石　龍の塩市村

ほ意味

巨石を切り出している砕石場である竜山南東部の頂上に平らな場所があり、そこに「魚崎構居跡」の碑が建っている。
この構居は戦国時代の神吉城の出城で、城主は位田長兵衛であった。
ここからは、”パノラマ風景”として、高砂・加古川等を一望できる。　眼下には法華山谷川や加古川が龍の姿を呈し播磨灘へ流れるのが観望でき郷愁を誘う場所でもある。

ま

万年　億年の
歴史を語る
竜山連山

み

（農民の）水不足
救った
金時　宗五郎

み

漲る力で　神輿練る
氏子の熱気
秋祭り

㊨意味

高砂市には竜山山地と呼ばれる小高い山がある。白亜紀の火山活動で出来たと言われるが、7000 万年から 1 億年前の火山活動でできた流紋岩質溶結凝灰岩は「竜山石」と呼ばれている。

ここには巨大な謎の石造物・石の宝殿と竜山の採石遺跡群があり、多くの岩壁の広がりが連続する。　旧石器時代 2～3 万年前の地球はと言えば、丹波方面では恐竜が闊歩していた時代。
竜山の山頂からもこの頃の石器が採取されている。　竜山にはどんな歴史がつまっているのだろうか？

㊨1意味

魚崎村　今の伊保が干魃で疲弊していた竜山の下に井溝を掘って、木の筧を沈め、村を救済した。　法華山谷川の下に石積み、トンネルをつくり導水する逆サイフォン（伏せ越し）を利用している。　この水利事業が完成した後は、魚崎村・魚崎新村とも豊かな水を確保することができました。その後、村民達は安政四年(1857)に、竜山のふもとに金時宗五郎・中村五郎右衛門の功績に感謝する碑を立てた。

㊨2意味

毎年 10 月の 3 週目の土・日曜日に生石神社の秋季例祭が行われる。　祭りのメーンは“二基の神輿練り”だ。黄色と赤の鉢巻きを締め法被を着た若い衆が、大穴牟遅神（黄）と少名毘古那神（赤）に分かれて練り合う様は、浜手の祭りにひけをとらない。

※神輿の宮入り、鼓笛衆の演技、屋台の練り合わせ、竹割り、神事としての　お面掛け、赤ばやし、遷御の儀、続いて神輿倉入れ、和太鼓、竹割、獅子舞、宮出し、が執り行われる。

む

昔の人も　偉かった
和算を解いて
感謝の算額

め

珍しい
名前の由来は？
なんじゃ　もんじゃの
綿雪の花

も

守屋と馬子
神仏巡る
丁未の乱

む 意味

算額とは、和算家が、数学の問題や答えを額に書いて神社仏閣に奉納したもので、江戸時代以降の風習である。生石神社には拝殿の上に 1876 年に、和算家の佐藤善一郎とその一門 5 人が、五つの問題とその答えを書いて奉納した算額があり、絵馬殿には、その複製が掲げられている。

※計算機の無い時代に、難しい図形の問題を、設問から解答まで、どうして出来たのか。　この喜びを、絵馬にして、人が集まる神社に奉納し、感謝の意を表した。

生石神社の算額絵馬は、高砂市指定文化財に登録されている。

め 意味

明治神宮外苑の道路沿いになんじゃもんじゃと言う木がある。「何の木じゃ？」と珍しい木の名を聞かれて知った振りして、答えたのがいつの間にか通称になったようです。　モクセイ科ヒトツバタゴ属の一種です。本種は小葉を持たない単葉であることから「一つ葉タゴ」の和名があります。

生石神社の拝殿横に“なんじゃもんじゃ”の木が育っている。五月初旬に、綿のように柔らかく、雪のように白い可憐な花をいっぱい咲かせる。

（開花時期は、 4/20 ～5/10 頃）

も 意味

守屋は排仏派、　馬子は崇仏派

宝殿は神様の住まいで、守屋が戦いに負けて浮石起こせず。

物部守屋は蘇我馬子に滅ぼされたが、逆であれば今の時代は？

歴史にたら、レバは無いが想像するのは面白い。“丁未の乱”とはその二人の考え方の違いによる宗教争いでした。

大連物部氏　⇔　大臣蘇我氏

排仏派　　崇仏派

参考：

（生石神社）　　（鶴林寺）

や

山の周辺（やまのしゅうへん）　奇岩（きがん）

オブジェの宝庫（ほうこ）なり

や 意味

竜山の周辺では、古墳時代から現代に至るまで、採石した形跡がみられる。

「石の宝殿及び竜山石採石遺跡」として、他の史跡群とともに国の史跡に一括指定された。（2014年10月6日指定）

竜山連山の採石跡を背景に風化状態、位置、などに季節の木々四季の風景が加わり、奇岩を引き立てている。それらを見つけながら周辺を散策するだけでも一日中楽しめる。

※不思議な模様、ゴリラ、ライオン、子犬猿、きつね、カッパ、紳士、仏さまの顔・人・動物の横顔・幾何学模様“赤・青・黄の三色変化が複雑に組み込まれている場所。

ゆ

夢の代の
蟠桃も遊んだ
珍なる宝殿

よ

横目で見て
踏まずに通る　五号墳
鏡・玉・槍
出土あり

ゆ意味

山片蟠桃はいまから 265 年前、寛延元年 1748 年に高砂の神爪に生まれ、13 歳のとき大坂の米仲買、升屋に丁稚奉公に行き後に倒産しかかっていた升屋を立て直し、仙台藩の蔵元にまで発展させた。（著者　山片芳秀）

「夢の代」には天文、地理、神代、歴代、制度、経済、経論、雑書、異端、無鬼、雑論の 12 巻から成るたいへんな著作品を完成させた。蟠桃というのは升屋の番頭さんをもじった名前である。　（本名　長谷川有則）

大阪へ出て、町人学者となって名を馳せた蟠桃も、子供の頃は石の宝殿で遊ぶたびに、不思議な石だなと思いつつ、謎はとけずに今に至っている。

よ意味

米田町島の尾根上にある墳丘は 4 世紀後半ごろ築造された古墳で 5 号墳と名付けられている。 鍵穴のような形をした日本独特な形式の前方後円墳で、1500 年あまりの年月の風雪に耐えながらも自然崩壊が進んでいる。

昔は登山道が古墳の中央を通っていたが、今は古墳を迂回して史跡を守っている。　登山家の気遣いが史跡を守っているのだ。

※発掘調査は 1975 年に行われ、後円部中央にある埋葬施設は竪穴式石室で流紋岩の扁平な割石に割竹形木棺が収められていた。発掘の成果として、鏡、ガラス玉、槍、鉾などが出土している。

ら

雷神に
オコゼの干物
奉納し

ら意味

オコゼは漢字で「鬼虎魚」と書き、顔かたちが奇怪で、背びれのとげには毒を持っている。山の神は女性で、自分より醜い魚を好み、機嫌の悪い時でもオコゼを差し出すと、静まったという言い伝えがある。

悪天候で山が荒れ、採石の危険なときには、山を静め、無事に山仕事が出来るようにオコゼを供えていたと古老は語っています。

※加茂神社の横の「山の神」には、昭和の中頃まで山の神が怒れば、オコゼの干物を奉納して慰めていた。家にも山の神が住んでおり、恐妻家はいつもオコゼを忍ばせていたらしい。

り

凜として
佇む神社の
御神体

り意味

高砂市の宝殿山の中腹に巨大な「石の宝殿」と呼ばれる謎の大石が鎮座する。　千数百年間、凜と佇んでいる。生石神社にご神体として祀られており、直接手に触れる事が出来る極めて珍しい御神体である。

この「石の宝殿」は竜山石と呼ばれる岩石の山肌をくり抜いて造られたもので、その重さは465tonと推定される。この特異な巨石・石の宝殿が作られたのは1300年以上前と推定される。いつ・誰が・何のために造ったかは謎に包まれている。

※参拝の時、浮石を触って、覗いて願掛けをしよう。

る

高御位山（高さ 304m）

「鯛砂利」位置
（石の宝殿の石屑）
高砂市阿弥陀町長尾の上
※伝説

れ

丸に三本矢

丸に違い矢

ろ

る

累々と　積む
鯛砂利は
高御位

れ

連綿と
続く採石
日本一

ろ

路傍に座る
矢羽根模様
何を語るや　家紋石

る意味

高砂市阿弥陀町長尾の「長尾奥谷」と高御位山中腹で「三つ岩」の下方に石屑が積み上げられている。今も「鯛砂利」とよばれ、魚の形をした石屑がある。土地の方の話では小さい頃から 村の長老に「鯛砂利」の場所について良く聞いた話とのことでした。木々の葉が茂っている時期は形がはっきりしないが、冬季に「鯛砂利」の谷を遠くから眺めると、鯛が尾をピンと上に向けた形に見える。この砂利は天人が地上に下りて来て「生石神社」の浮石”を造った時に投げ捨てた石屑との伝説がある。

※生石村に「息継ぎ井戸」で休憩して高御位山へ石屑を運んだ伝説もある。

れ意味

竜山連山の石山は1700年間続く採石遺跡群が散見される。全国的に見てもこれだけ継続してきた地場産業は、見当たらない。

2014年10月に「国史跡」に指定されている。　採石業は現在では3社が稼働中です。「石の宝殿及び竜山石の採石場」は現在まで1700年間採掘され続け、採石業と遺跡群が人を惹きつけてやまない。

ろ意味

石の宝殿への登り口階段横の家紋石は、白龍神社周辺で採石時に落下の衝撃で真っ二つに割れてしまった。丸に違い矢と丸に三ツ矢の紋は誰の紋かは謎のままである。

名産品を加古川流域で運ぶ仕事は高砂神社周辺の旧高砂城主の所管であったらしい。伊保山山頂にあった竜山石製の家紋石は、竜山名産を運搬する力を持った殿様の紋かも・・・これも謎の一つである。

※池田輝政が梶原の城（旧高砂城）のあとに高砂城を築いたとも、小松原城　三社大神社境内に、梶原氏の城があったとも言われている。高砂竜山にも影響があったと思われる。

わ

割る石目
端から浮いた
座り疵

を

大穴牟遅神・少名毘古那神の
居ましけむ
鎮の岩窟の　生石神社

わ意味

宝殿山のあちこちに、座り疵が散見され浮石の底に繋がる。
（水平方向に走る層理と言う切れ目で、古くは石工の間では「大ズワリ」または「座りキズ」と呼ばれている。）

浮石の底部は最初から割れていたように見える。岩盤と縁が切れている状態を石工の専門用語で「この石は浮いている」という。

を意味

（播磨国風土記）
伝えて曰く、聖徳の王の御世に弓削大連の造れる石なりと記す。

（峯相記）
生石・高御位の二神が天から降り、石で社を造ろうとしたが、夜が明けて起こすことができず、そのままになっている」と記載

（万葉集）・・・生石神社
大汝と少彦名がいらっしゃる志都の岩屋は、どのくらい昔からあるのだろうかとの意味

（山片蟠桃）「夢の代」石棺の未完成品
・・・ほか多くの考古学者の推理もあり
いつ、誰が、何のために造ったか？

ん

縁(えん)あって
趣味人集(しゅみびとあつ)まる
石研(いしけん)くらぶ

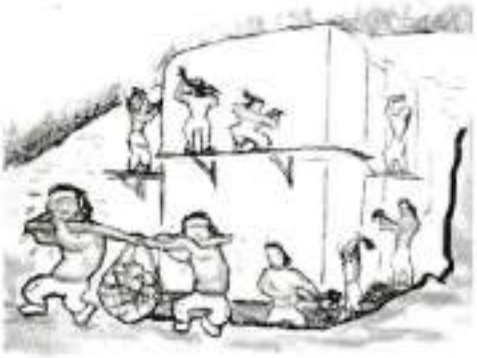
ん意味

運(うん) 開(ひら) け！

石の宝殿　日本の三奇
いわれも古き　神秘な聖地
古代の技術　ここにあり

史跡の周辺
魅力求めて　日々研鑽
石の宝殿　謎の浮石

石の宝殿研究会



協賛者一覧表

（順不同・敬称略）

かたしま・きたうら産婦人科病院	モリス株式会社
和膳　松たに	株式会社不動産センター・タイ田
ヤング開発株式会社	松隅建設株式会社
中野プランツ株式会社	前川建設株式会社
株式会社籠谷	土井建設株式会社
株式会社ソネック	但馬信用金庫
株式会社松下石材店	兵庫南農業協働組合
野々村産業有限会社	株式会社トクラ
	中谷建材株式会社

ご支援をいただき、ありがとうございます。

令和2年度　石の宝殿研究会
石の宝殿・史跡かるた作成実行委員会

浅原　勝	髙岡一彦	松村　聡	渡部豊光	橋本猛志
唐津哲男	田中貞男	森　康夫		冨田　卓
白井信雄	二木賢治	山下賀津子		上原一平
外川正明	原　英俊	横溝敏男		（故）　東　博昭

石の宝殿　　史跡かるた集

―石の宝殿・竜山周辺史跡の魅力を伝える―

令和２年（2020）12 月　第１冊印刷
編集・発行：石の宝殿研究会　　史跡かるた作成実行委員会
http：//石の宝殿研究会.com　/
〒676-0805 兵庫県高砂市米田町米田 955-2
☎　090-6917-9919
印刷・製本：ハリマニックス株式会社

この冊子の内容、テキスト、画像などの無断転載・無断使用を固く禁じます。

石の宝殿研究会（愛称：石研くらぶ）とは

高砂市の宝である石の宝殿と竜山周辺史跡の魅力を発見し、高砂市内外にこれを伝承し、広めて行くことを本会の目的とする会です。

この事業は、兵庫県東播磨県民局及び
心豊かな美しい東播磨推進会議から
「東播磨地域づくり活動事業」の
助成を受けています。